

二〇〇九（平成二十一）年度安居論題提要

一、機法一体

【題意】

『御文章』に用いられている機法一体の意味を明らかにする。衆生の信心は如来のはたらきを領受したものであり、衆生の信心（機）と衆生を救う力・はたらき（法）とが別々のものではないことを明らかにする。

【出拠】

『御文章』三帖目第七通等

【积名】

「機」「法」「一体」

【義相】

①機法一体の用例

②機法一体の积相

(i) 二字四字の分积

(ii) 六字全体の积

③仏凡一体との同異

二、大行名体

【題意】

親鸞聖人が积頭された大行の名義と物体をうかがい真実大行の義を明らかにする。

【出拠】

本典「行文類」

『浄土文類聚鈔』

【积名】

「大」「行」

【義相】

- ①大行の物体
- ②本典における「行文類」の地位
- ③第十七願の我名と第十八願の乃至十念の関係
- ④行信の関係

三、本願一乘

【題意】

成仏の法は本願一乗のみであって、聖道門及び浄土門内の要門・真門を権仮方便として、本願の一法のみが真実の法門であることを明らかにする。

【出拠】

「行文類」一乗海釈

『愚禿鈔』

『一念多念文意』等

【积名】

「本願」「一」「乘」

【義相】

(一) 一乗の義を明かす

①所至の果の究竟

(i) 大乘・仏乗の義

(ii) 二乗・三乗の義

(iii) 誓願一仏乗の義

②本願の力用

(i) 同一鹹味

(ii) 不宿屍骸

(二) 念仏と諸善との比較

(i) 教について

(ii) 機について

特別論題に基づく自由討議

「別離苦の救い―突然死の悲しみを考える―」

【目的】

浄土真宗の僧侶は、突然の死によって別離の悲しみを経験した人々と、どのように関わることができるかを考える。

【討議にあたって確認しておくべき点】

一、死別直後の遺族の思いに対する配慮。

二、僧侶として日常から心掛けておくべきこと。

【論点】

- 一、浄土真宗では臨終のあり方を問わない。
自死（自死）は悪なのか。
- 二、僧侶と遺族との乖離を埋める手立て。
僧侶の遺族への対応の問題点。
遺族は僧侶へ何を求めているか。
- 三、僧侶は遺族との対応で何に戸惑うのか。
通夜・葬儀での戸惑い。
葬儀以降での戸惑い。

【討議のすすめ方】

討議はパネルディスカッション形式ですすめる。それぞれの問題について発言者四名程度に各自の見解を述べてもらい、その発言に対し質問者四名程度と発言者が自由に討議を行う。

【参考文献等】

- ・ 『自死、遺された人たち〜死別の悲嘆によりそって〜』 教学伝道研究センターブックレット 本願寺出版社
- ・ 『自ら逝ったあなた、遺された私―家族の自死と向きあう―』 平山正実著 朝日新聞出版
- ・ 『人生の危機における人間像―危機からの創造をめざして―』 平山正実著 聖学院大学出版会
- ・ 『死別の悲しみに寄り添う』 平山正実著 聖学院大学出版会
- ・ 『封印された死と自死遺族の社会的支援』現代のエスプリ 501 清水新二編 (株) 至文堂